



【いくら弱くてもあなたも尊く用いられます！】

*今日の聖書の本文：コリント人への手紙第二12章5-10節

説教者：鄭南哲牧師

*今週の暗唱聖句：コリント人への手紙第二12章10節

(Rev. Jung nam-chul)

“神様を信じて仕えるのに一番の障害物は何か?” について、みなさんは考えたことがありますか。私はこの質問ほど簡単な答えはないと思います。“それは自分自身”だと思えます。私たちは自分がいやな時がしばしばあります。自分を愛することが精神健康に良いと理論的にはよく知っていながら、実生活において自分の欠点、弱点、短所などの自分自身に対して、どうしても自分が好きになれない自分が嫌な時はありませんか。そんな弱すぎて、たりなさすぎる自分の多くの面がどうしても嫌で不満足でありながらも、反面だれかが自分の弱さを指摘すると、ものすごく相手を攻撃したり、ネガティブに反応してしまう時が多くあります。

私も自分の弱さに気づくとそのたびに自分自身にこう言い聞かせる時はないでしょうか。‘こんな自分で、主のために何ができるだろうか。’、‘なぜ、イエス様はこんな足りない、変わらない私のような者を選んで愛し、救ってくださったのか。’、‘私なんて主の栄光のために用いられるのに資格なんかないだろう’などですね。みなさんはどうでしょうか。このような時は最近まったくないでしょうか。

実は多くのクリスチャンの中で、神様に用いられる人なら、すくなくとも自分のように特別賜物もなく、能力もない普通の人とは違った、何か特別な資格や力、特徴があるのではないかと思う傾向が多くあります。体表的にイエス様の12人の弟子たちについてそう思っていませんか。イエス様の12人の弟子たちは特別な人たちで、自分とはレベルが違う人だと思える方が多いかも知れません。しかし、彼らは我らと違いないあまりにも平凡な人たちでした。それだけではなく、むしろ欠陥が多くあった人たちでした。聖書を詳しく見ると、彼らはイエスキリストが弟子たちに祈りなさいと言われても、1時間はとにかく、10分もしぎないうちにすぐに眠ってしまうほど心から祈ったことも、祈る方法もまったく分からず、意志もとても弱い人たちでした(ルカの福音書22章39-47節)。イエス様の足に香油を注いだマリヤに、「この香油を売って貧しい者たちに与えればいいのに、どうして無駄な遣いをするのか」とイエス様につぶやき、まったく霊的洞察力(どうさつりよく)のない愚かで鈍い人たちでした(ヨハネの福音書12章3-6節)。また自分たちに従わない人に対しては、「天から火を下して滅ぼしてしまおう」と相手のことは何も考えないで呪いの言葉まで吐くような軽率(けいそつ)な人たちでした(ルカの福音書9章54節)。

また、イエス様について行きながらでも、将来イエス様のために自分の一番功労がある者だと思い込み、他の人より自分をもっと多くの利益をとりた、もっと上の身分を自分が先にとりた目当てのため、お互いに争った人たちでした。そして、ある弟子はイエスキリストを裏切ってお金をもらってイエスキリストを売った弟子もいました。ひたすら自分の身を守るため3度もイエスキリストを呪いかけながらも、イエス様と何の関係のない者だと誓いながら、イエスキリスト否定した弟子もいました(マタイの福音書26章74節)。イエスキリストの十字架の前ではほとんどの弟子たちはイエス様のせいでも自分も捕らわれてしまうのではないかと怖くて逃げていたそんな臆病の人たちでした。これらを見るだけでも、弟子たちは平凡だったよりも、むしろ欠陥や弱さが多かった人々であることが分かります。

けれども、あんな弱さと欠陥だらけの彼らは、イエス様の教えを受け、悟りながら変えられ、やがて彼らは、神様の教会を建てる原動力(げんどうりよく)となり、主の教会に欠かせない大切な存在として、さらに尊く用いられたことが分かります。欠陥だらけの弟子たちでしたが一方、弟子たちは単純で、誠実で、素朴で、情熱的でした。そして、何よりも彼らの一番の強さは主に学ぼうとする謙遜な心があったため、すべてを後回しにして最優先に主についていくことができたゆえに、だれより大いに主に用いられた者になりました。まるでイエス様の弟子たちは一言で、粘土のような人たちでした。

神様に用いられた人々はみんな共通に、特別な人たちではなく、あまりにも平凡な粘土のような人たちだったので、陶器師(どきし)がこしらえたり、弄(いじ)る次第に、陶器師の願う形に作られ、変わっていきました。ですから、今日我々にもいくら多くの弱さがあり、欠陥があり、過ちも多くても、神様にはそれがまったく問題になりません。むしろ、今日の本文のパウロを通して、その弱さを主は強くさせ、主に用いられる祝福の人生として生きることができることを一緒に学び、確かめ、その真理を握って行きたいと願います。みなさん、まず、自分自身に、そしてお互いにこう教えて下さい。“いくら弱くても(わたしも/あなたも)尊く用いられますよ!”

<今日の御言葉の本文の内容> パウロの肉体の弱さ・肉体のとげ

今日聖書の本文の御言葉には弟子たちのようなもう一人が出ています。弱い我々にとっても励みになる使徒パウロの告白が記されています。皆さんもご存じのように、神様の人パウロは確かに全ての人にすばらしい信仰の模範となる偉大な神の人だったでしょう。彼は神と尊いたましの救いのためなら、いったん心に決めると、前向きで前

進んで行く力強い神様のしもべであり、新約時代主の教会を地上に建て上げるため一番用いられた指導者、伝道者でした。そんな特別偉そうに、完璧な人かのように見えたパウロでしたが、いつも自分の弱さを徹底的に感じさせる何かがあったことがわかります。おそらく、彼の肉体にあった難治の病気があったのではないかと思わされます。それを本文7節でパウロは「**肉体のとげ**」だと表現しました。「**また、その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢ならないように、私を打つための、サタンの使いのです。**」

そのとげが何かについては様々な意見があります。ある聖書学者は持病(じびょう)の眼疾(がんしつ)(ガラテヤ6章11節「御覧なさい。こんなに大きな字で私はあなたがたに自分の手で書いています。」)を病んでいたため、あんまりにも視力が良くなかったと言っている人もいれば、ある学者は、当時人々がはじと思っていた癩癩(てんかん)を起こす病気ではないかと推測する人もいます。耐え難い苦しい皮膚病だと言われてもいます。とにかく、あんなに神様に偉大に用いられていた使徒パウロでしたが、どれほど彼を耐えがたい苦しめ続けて来た肉体のとげだったのでしょうか。彼はその難病を「**私を打つための、サタンの使い**」だとまで言っています。**その体に深く刺され取り除くことのできないこのとげのため、パウロ自身は常に自分の弱さを認めざるを得なかったでしょう。彼が他の人たちの為に祈ると、素晴らしく奇跡が起こり、多くの人々が癒されたのにも関わらず、自分のこの病気を治すことが一生できなかったことがわかります。**

ところが、そんなパウロはどのように告白していますか。自分のこの弱さにもかかわらず、その弱さのゆえに、かえって自分の強くなれるのだと証ししています(本文10節「」)。これはおどろくべき**逆説(パラドックス(Paradox))の祝福**が秘められています。逆説は矛盾(むじゅん)に見えますが、かえって真の真理を学ぶことができます。**パウロの逆説的な告白を通して学ばされることは、どんな自分の弱さがあっても、神によってまことに強くなれることです！**

【神はどのように、我々の弱さを強くさせ、さらに尊く用いて下さるでしょうか。】

①神は人の弱さと限界を経験させ、高慢にならず、謙遜への導いてから用いて下さる。(本文6-7節)

人生の中では、いわゆるすべてがうまく行っているような時があります。この時、私たちはたやすく自分の能力を過大評価(かだいひょうか)する危険性があるでしょう(本文6節「**だれかが私を過大に評価するといけないので、私は誇ることを控えましょう**」7節「**高慢にならないように**」2度も強調!)。心理学者たちはすべての人の内面には自分を神格化する「**自我神化コンプレックス**」が存在すると言っています。計画通り、思った通りうまく出来る時に、自分がまるで全知全能の神にもなったかのような自己を偶像化してしまう可能性があるということです。こんな笑い話があります。精神病院に入院しているある患者が毎日「私は神のこどもだ」と叫んでいたのも、となりにいたある患者がこう言ったそうです。「お前、しっかりしろよ。僕はね。お前のような子供がいないんだ。!」

聖書の創世記を見ると、人類の歴史が始まる時、サタンがはじめの人だったアダムとエバにやって来て誘惑した言葉は何でしたか。「**あなたは神のようになる(創世記3章5節)**」ということでした。

我々は今もたえず、そのような誘惑を受けています。「もう忙しいし、時間ないし、すべてが順調だから、しばらく祈らなくても全然大丈夫だろう！今までの経験上であなた自身が一番分かっているから、自分で決めてやれば良いんだ！自分は決して弱虫じゃないから、別に神に頼らなくても、自分をつよく信じてやればよっし！」など。

ですから、神様はときどき、我々の人生において自分の限界を悟らせてくださる時を与えて下さるのです。

使徒パウロは自分の肉体の弱さを覚えていました。いくら祈ったのでしょうか。他の人たちのためにはパウロが祈れば、素晴らしく奇跡的に答えられていたのに、自分の苦しい病を治して下さるように何度も祈っても病気が結局治らなかったのです。しかし、パウロは自分の体の苦しみを通して、**自分は神のような存在ではないことと、そして、7節に2度も強調しながら自分が高慢にならないように謙遜の場にしっかりとどまらせるために、神は自分の体にとげをくださったと告白しています。**

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！**パウロは当時どんな人物でしたか。神様に特別に用いられた神様のしもべでした。パウロが行くところどころ、人々は彼をとおして福音を受け入れ、主の教会が立てられました。町々が変わり始めました。このぐらいすると、当時の人々はきっとパウロを神のような存在として拝もうとするはずだったと思います。**

パウロ自身も弱い人でしたから、最初の献身の姿から、少しずつ変わり、高ぶりになりやすかったかも知れません。しかし、このパウロの体を苦しめるとげを許されたのはむしろ、パウロを大切にされ、愛しておられ、パウロが**高慢にならないようにさせ、ずっとパウロを用いようとするためでありました。パウロ自身は体の苦しみを通して、いつも自分も限界のある人であることを悟らせ、一生変わらず、神の前で謙遜にだったため、大いに用いられたことがわかります。**弱さを通して神の前でいつも自分が限界のある人であることを自覚し、謙遜になる時こそ、神の恵みと祝福を頂き、神に用いられるためであったことが神の深い目的であり、神の処方(しょほう)でありま

した。「神は、高ぶる者には 敵対し、へりくだった者には恵みを与える。ヤコブの手紙(James)4章6節」

②神は人の弱さを通して、我らを祈らせ、神の力と助けを頂き、強くさせ用いて下さいます。(本文8節)

それではみなさん、どうして自分の弱さと限界を自覚することがパウロに、我々にもマイナスでしょうか。

使徒パウロが自分の肉体の苦しみのとげを経験しながらどう反応してましたか。

本文8節を見てみてください。謙遜になり、祈っています。

三度も切に神様に願ったと言いました。祈るということは何だと教えて下さってしますか。それは自分から神に向けさせ、神様神様に頼り、神の助けと力を頂ける祝福の道であるのを教えて下さいます。我々が神様に祈るからといって、かならずしも自分の期待どおり神の答えじゃない時もあるでしょう。神様はYESメンじゃないですから。神様からの祈りの答えには‘Yes(いいよ)も、No(できません)、Wait(まだ、時まで待ちなさい)’この三つがあると云われます。この中で、今日の本文で使徒パウロの祈りは神様から‘No’と答えられました。しかし、この‘No’はもっといい‘Yes’だったことを忘れてはいけません。パウロに肉体のとげを残した事により、祈らせ、一生神様の前で変わらず、高慢にならず、一生神に頼りながら生き、謙遜に最後まで人生の使命を全うすることが出来るようになったからです。ここで、教えられるのは、我らの期待通り、応えられなくても、神のご計画と御業は我らの考えと期待によりはるかにまさり、どちらにせよついに我らにすべて必ず有益になるように導いて下さる事が分かります。ですから今すぐ祈りに答えられないとして失望しないで諦めないで下さい。

愛するみんなさん！我々にもある時神様に切にYES!して下さるように求めても、NO!と答えられる時があります。その時、みなさんもう神様から断られた！答えられなかった！と思わないで下さい。みなさんにとって今のYES！

よりNO!になった方がより最善であり、ましであることをご存知の神様の摂理と計画のゆえであることを忘れないで下さい。大切なのは、パウロが祈る事によって得た答えだったことです。パウロはNO!つまり、自分の体の痛み、苦しみは続けられ、取り去れなかったですが、却って、そのため、彼はつづけて、一生謙遜に神に頼りつつ、祈る事によって、徹底的に神中心の人生を送ることができたわけでありませう。

ですから、究極的に人の弱さは神様の御前で謙遜にされ、祈りに導き、心から神に頼れることにより、神の助けと力を頂き強くなれるのである！！そういうわけで、パウロはこう告白しました。

10節にだから、「私が弱いときにこそ、私は強いからです！」なので、神の前でパウロは自分の弱さを喜んで誇ると告白することができたのです。

愛するみなさん！ですから、神の前ではいくら弱くても大丈夫です！その弱さをもって心から神様に頼る時こそ、われらをもパウロのように、神の力によって、助けられ、神の御手の中で豊かに用いられるのです。

最近毎朝リビングライフのディボーション集で出エジプト記の御言葉を黙想していらっしやるでしょう。

神はイスラエルの民を救い出そうとするために、ナイル川で葦のしげみで作られたかご(ヘブル語「テーバー」は旧約聖書でノアの箱舟にのみ使用されています。)の中にいた人間の無力さの中で流されていたモーセを神は御守り、救い出し、用いようとされました。わざと、神を忘れないように、信仰教育のため、母ヨケベデをモーセの乳母(うば)としてそばに置かれました。

しかし、モーセがエジプトの王子として、40年間最高のエリートの教育を受けながらも、人が作り上げた人間の帝国の世界で、いつのまにか神のような絶対的な存在と権力に酔ってしまったモーセは、自分の感情すら、コントロールが出来ず、人のいのちを簡単に殺してしまう人になってしまいました。神はそんなモーセを用いられない為、また同じ期間、40年間、エジプト帝国から離れさせ、ミディアンの荒野での寄留者、逃亡(とうぼう)者、羊飼いとさせ、自分の力は何者でもなく、徹底的に神のみを見上げ、頼れるようにへりくだらせてから、用いて下さったことが分かります。

それに対して、新約聖書の中使徒の働き7章を読んで見ますと、ステパノ執事はモーセの生涯を40年間という間隔(かんかく)で三つに分けています。エジプトの王子であった40年、荒野ミディアンの牧者であった40年、イスラエル民族をエジプトから脱出させた指導者としての40年です。

この三つの段階にかけられたモーセの人生の中で、神様がモーセを用いて下さったのいつでしたか。

自分が低くされ、謙って、謙遜に神様だけを頼った時からでした。自分は何でも出来る者と考えている時ではなく、むしろ、自分自身の限界と足りなさ、無能さを自覚し、神様の前でへり下さり神に心から頼った時に、自分では絶対出来ないことを神によっては何でも出来るのを体験出来ました。

この事実を通して神様はどんな人を用いられますかが分かります。神様は自分の弱さを認めつつ、神様だけに心から頼る人を助け、用いられます！この真理を逆に言い換えて見ますと、だれであっても、神様を絶対的に頼るようになるまでは用いられないという真理の教訓を今日も我々が覚えておくように願います。

アメリカの有名だったD.L.ムーディ先生は聖書でモーセの生涯についてこのように描写しました。「モーセははじめの40年間は自分が大した人物(something)だと考え込んで生きました。けれども、その次の40年間自分が何者でもないこと(nothing)をようやく知る悟りに至る時でした。そして、最後の40年間は、何者でもない自分(nothing)

ng)を神が捕らえ用いて下さったので、神の御力により、何でも出来る者 (everything)になることもできる人生を経験し、用いられる時を過ごせのだ。」

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！モーセがエジプト宮殿中で王子として暮らしていた時、自分には何でも成し遂げられる力があると思ひ込んで、自分は大した人物(something)だと思ひ込んでいました。その後40年間ミデヤンの牧者として過ごした時には、荒野の中で、自分自身が何者もないしもべ(nothing)であることを悟りました。そして、最後、彼の人生の80歳になってようやく、モーセは自分には何もできないが、全能の神の御手に捕らわれ、助けられ、用いてくださった時こそ、神によってどんなことでもできる(everything)ということを経験したのです。

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん！私たちの人生もこれと同じではないでしょうか。

「私たちは、この宝を土の器の中に入れてあります。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。」(コリント人への手紙第二4章7節)

聖書は私たちを割れやすい、ひびだらけの土の器のような存在ですが、しかし、その中に神の宝が蓄(たくわ)えられた土の器だと教えています。

神の前で自分自身が土の器のように、自分は弱くてnothingだけど、キリストにあって祈り、助けられ強められと、everythingになれる(信仰をもって何でもできる)という大切な尊い存在ことになります！

なぜならば、私たちはただの器ではなく、神様の宝を内に蓄えた土の器であるからです。

この力を発揮する鍵は、私たちがどれほど謙遜に神様に頼っているかどうかによって神の力と御助けがともにあるかどうかにかかっているということでしょう。

「あなたの重荷を主にゆだねよ。主があなたを支えてくださる。主は決して、正しい者が揺るがされるようにはなさらない。」(詩篇55篇22節)

③神は人の弱さを通して、神の恵みを悟らせ、感謝と喜びに満たしつつ用いて下さいます。(本文9-10)

今日の本文で、パウロには離れさせられない、ずっと自分を苦しませる体のとげを通して、こんな限界のある弱気自分であるのにも関わらず、ここまで神に用いられて来た自体が、どれほどの大なる神の恵みによる人生だったのか、感謝と喜びを見出し、からだの痛みと苦しみよりも、はるかに大いに感謝と喜びに満たされて働き用いられた者であることが分かります。今日の本文9-10節にパウロはこう告白している内容を見て見ましょう。

神は自分の弱さを通して、神の恵みを悟らせ、感謝と喜びをしっかりと保つようにさせながら、人生の使命と責任を果たせるように用いて下さいます！

新約聖書では感謝という言葉はユカリスティア(Eucharistia)という言葉で使われています。この言葉は恵みを意味するカリス(Charis)と言う言葉から派生されました。恵みとは一方的に施して下さる神様のお贈りものです。

そして、面白いところは、このカリス(恵み)と言う言葉から感謝を表すユカリスティア(Eucharistia)だけではなく、喜びを意味する‘カラ(Chara)’と言う言葉と力、能力、賜物を意味する‘カリスマ(Charisma)’という言葉も派生されたことが分かりました。

つまり、これらの言葉を感謝と関連して分かりやすく解けて見ると、感謝は神様からの恵みを経験し、受けた者たちに与えられる心とその人の反応であり、感謝は真に喜びの人生として生ける力になれるものであることが分かります。主に感謝することは神様からのもっと多くの感謝を頂ける道になります。ですから感謝にはカリスマのような能力があり、人生を変える力があることが原語の言葉を通して分かるようになります。

だれよりこの世に来られたイエスキリストこそ、直接感謝の模範を弟子たちに示して下さいました(マタイ11:25、ヨハネ11:41)。そして感謝の大事さを一貫的に教えて下さいました(ルカ17:16、18)。イエス様は十字架につけられる前にも、最後に弟子たちとパンと杯をもって感謝をささげながら晩餐の時を大切に持って下さいました。それは、これから多くの罪人たちを救うために十字架で苦しめられ、裂かれるご自分の体と罪を赦すために流すご自分の血を覚え、いつまでもイエスキリストのその愛と恵みに感謝を持って、よみがえられ生きておられる主と日々交わりことが、弟子たちがゆたかに用いられ、祝福されることを忘れないようにするためであります。

その聖餐式を英語でユカリスト(Eucharist)って言います。ユカリスト！どこか聞いた覚えがありませんか。

そうです。先ほど感謝と言うユカリスティア(Eucharistia)というギリシャ語から出た言葉です。ですから、聖餐式の時はただイエスキリストの十字架の御苦しみと贖いの死を覚えながら、悲しくなる時間ではなく、罪赦された主の恵みと愛の応答として、主に感謝をささげながら、改めて主のため、主と共に覚えて生きたいと決心する時間あります。

実は生きてきている今まで我々は多くの人からの愛を受けました。我々がすべきことは感謝を表すことです。感謝する気持ちだけでは足りません。言葉でも、文字でも、なんだかの形で感謝を表さなければなりません。今の時代を4無の時代だとよく言われます。‘無感動、無責任、無関心、無目的’の時代だと言われています。だからこ

そ、この時代感謝が必要です。感謝を表すと相手が感動することをご存知ですか。なぜですか。感謝を表す人は少数なので、感謝のできる人に会うと感動を受けます。弱さの中でも用いられ良いことを続けさせる道は感謝を表すことです。もっとすばらしい祝福は感謝を表す時の相手だけではなく、感謝を表す我々の心も感謝と喜びで満たされるということです。

パウロも絶えず感謝する人でした。特に注目すべきところは使徒パウロの感謝を一言で表すと、とげの感謝でした。彼は病を持ち、それを肉体のとげだと読んでいました。自分の体のとげのため、彼はいつも苦しんでいました。しかし、自分の弱さをむしろ感謝し、自分の受けた苦難さえもすべて感謝していました。

「ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、苦難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」（第二コリント12：10）

今日使徒パウロは一生苦しみを通して、かえって自分の人生の全生涯は神であることを悟られ、感謝と喜びを忘れず保っていたため、病を負っていても、だれよりも主の為に大いに用いられました。そして、さらに我らにも主の恵みを感謝する人になって大いに用いられるように勧めています。「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」（コロサイ人への手紙2:6-7）

<結論> 神の前で自分が弱い者であることを認め、謙遜に頼り祈る者こそ、強くなり、尊く用いられます！

去年一年間のそれぞれの出来事を通して教えられたことは何でしたか。よく出来た事も、願いや目標を達成出来感謝のこともあったと思われませんが、よく自分の力不足、自分の限界、自分の耐え難い弱さをよく経験し悟られた一年だったのではないのでしょうか。しかし、大丈夫です。それを教えられたならば、また新しく始まったこの4月、今年21度、新学期にはさらに謙って謙遜に神様にゆだね、常に祈りつつ神の御力に頼んで行きましょう。主がみなさんの人生をもさらに最善に導き、尊く用いて下さいます。

我々は信仰についてこのような間違っている考えをする場合があります。‘イエスキリストを信じるなら、すべての問題は解決され、いつも成功の平(たい)らかな道を歩む事になるだろう’しかし、みなさん、それはうそです。神を信じているクリスチャンだから、いつも成功と安逸(あんいつ)だけを約束されているのではなく、かえて失敗と苦しみも経験します。

神様の御前で偉大な勝利を経験した人も、みんな人生の色々な失敗や過ち、試練も経験されたことも忘れないで下さい。みなさん！なぜ神様は時には我々にその試練も許して下さるのでしょうか。思わぬ試練や失敗を通してただ自分の力と努力で一生懸命に走り続けようとする我らに、神はわざと人生にブレーキをかけ、しばらく立ち止まらせて、神の前でへりくだらせ、神を見上げられるように導いて下さいます。「苦しみに会ったことは、私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。」（詩篇119篇71節）

大人になっていまだに我々が謙って学ぶ時の大きな障害は、変わろうとしない、頑(かたく)々な心、従おうとしない態度かも知れません。しかし、人の苦しみはその高慢を砕き、忙しくて複雑な生活を整理し、シンプルにさせ、その人のうちに神に頼ろうとする心の姿勢を作り上げて下さいます。

愛するみなさん！世の中で一番付き合いづらい人は、自分には何の問題がないと思い込んでいる人、自分がいつも正しく、問題ないと思い込んでいる人です。いくら才能やたくさんの物をもっているとしても高ぶっている人は決して主に用いられません。ユダヤ人たちの一番よくない弱点は、律法主義という枠(わく)を自分で定めておいて、その枠に会う人だけを受け入れ、その以外の人はみんな異邦人であり、裁きました。心から主に謙り、委ね、学ぼうとする心がなければ、益々人の心と人生は頑なになる一方で変わりありません。

神の前で弱くても恥ずかしく思わないで下さい。弱くても大丈夫です。いや、むしろ、神は、神の前で、正直に自分の弱さを認め、へりくだって神の助けと力を、神の知恵を心から求める者を助け、尊く用いて下さいます。新しく任命された21年度の奉仕者我らみんな、神の前でどれほど、弱い者で、足りない者でしょうか。しかし、みなさんをさらに尊く用いようとしておられるのを忘れないで下さい。

愛するみんな！人生は、少しの間この世に来て去る旅ではありませんか。人生は巡礼者、旅人のようなものなんです。私たちの前を歩んだ多くの信仰の先輩たちは、みな我らと同じようにこの地上では弱い旅人として歩きました。この地では、苦難も、弱さも、しばらくの間、通り過ぎる旅路が私たちの人生であることを覚えて、始まった21年度にさらに主に謙って、自分の限界を認め、主に拠り頼み祈りながら、今まで、ここまでの我らの人生がすべて主の恵みの人生であったことを覚え、今もなお生きておられる主に感謝と喜びを保って歩まれるみなさんとなりますように切に祈ります。そして、弱くても、いつも家庭で、牧場で、教会でイエス様の愛のうちに、感謝と喜びを持って回りにいる弱い人たちを助け、支えて行くことができますように、21年度にみんなさらに神の全能なる御手の中で大いに用いられるクリスチャンプレイズチャーチの全神の家族共同体となりますように切にお祈り申し上げます。アーメン！